

4-4			
主題	新規施設において看取り介護を可能にする研究		
副題	施設看護師がゼロから始めた職員育成と家族へのサポート		
キーワード1	職員育成	キーワード2	看取り
研究期間	25ヶ月		
法人名	社会福祉法人 練馬区社会福祉事業団		
事業所名	上石神井特別養護老人ホーム		
発表者：	渡邊直子（わたなべなおこ）	アドバイザー：	竹村恵子（たけむらけいこ）
共同研究者：氏名 米田啓子 橋本和代			
電 話	03-5903-3051	FAX	03-5903-3052
今回発表の事業所やサービスの紹介	平成 25 年にオープンしたばかりの練馬の静かな住宅地にある小規模なホームです。施設長を筆頭に職員が率先して畑づくりや雑草取りをし、清掃なども委託に頼らず自分達でこなし若い職員達を牽引しているアットホームな施設です。そして大勢のボランティアの支えにより入居者の余暇が充実しています。		

《1. 研究前の状況と課題》 平成 25 年 5 月の施設オープン当初から受け入れ入居者は超高齢、重介護度、複数疾患等があり看取りを視野に入れたケアを即実践せざるを得ない現実があった。入居時に本人や家族へ終末期をどのように迎えたいかのアンケートを行った結果、延命に関する意思確認ではほとんどが延命処置を希望しないとの意向であった。 しかしながら、施設での看取りを希望されても終末期の不安定な状態になった時、家族は困惑、葛藤し動揺される。その思いを受け止め悔いのない選択に導くには家族との信頼関係と医療連携体制の構築が課題であった。加えて看取りが未経験の職員がほとんどであるため施設一丸となった看取りケア研修方法の確立と実践が急務となった。 そしてユニットケアの長所を活かし、日常の生活の延長にある老衰が自然な最期として迎えらるよう本研究に取り組んだ。	《2. 研究の目的ならびに仮説》 当施設では個別ケアを目指すにあたり5つの理念を作った。 1. 一人ひとりの人生を尊重して暮らす。 2. 生きがいを持って暮らす。 3. 家族との時間を大切に暮らす。 4. 家庭的な雰囲気の中で暮らす。 5. 施設に入居しても地域で暮らす。 これらの理念を一つ一つ踏襲していくことで職員は看取りに対して気負ったり、不安を抱いたりすることなく家族と一緒にその人のありのままを受け止め、看取り介護の質の向上に取り組むことを目的とした。 同時に個別性の大きい終末医療について家族のみならず全職員に対して看取り期の施設における医療対応について個別的要素をふまえた十分な説明を配置医師と看護師が適切な時期に行い他職種間で連携し合い、意見交換ができる環境作りを目的とした。
---	--

《3. 具体的な取り組みの内容》

1. 介護職員の成長を目的とした取り組み
全職員 33 名のうち看取り未経験職員 18 名の人材育成強化のため事業団での新人研修や外部研修を受ける機会を作り円滑に業務ができるまで介護リーダーがサポート。施設内研修では看護師が中心となり全職員を対象に少人数での「いつでも研修」「出前研修」や個別ケースのOJT,介護職員からの「リクエスト研修」を重ね24Hシートに活用した。
看護師は夜間オンコール対応を行い、入居者の状態悪化時には勤務時間をシフトする等、柔軟な対応で夜勤者の業務負担、精神的負担の軽減を図った。
2. 看取り期を指南してもらう医師を一番のよき理解者にする取り組み
日頃より看護師は回診時に入居者の生活の様子、家族のエピソードを医師へ発信。家族との会話がスムーズに進み良好な関係が作れるようサポートした。
体調変化時に 24 時間連絡相談が可能な体制を整えた。
3. 家族との関わりをより深めるための手段
ユニットケアの長所を活かし入居者と家族が水入らずで心に残る思い出作りができる環境に配慮した。
日頃から職員と家族が一緒に看取り介護をするための細やかな情報共有をした。
4. 事例紹介
多職種連携で取り組んだ食事のサポート～本人と家族が最後まで食事を希望された事例を通して～
5. 看取り後、グリーフケアを含めた振り返りの機会とアンケート調査
家族懇談会にて看護主査が施設での看取り介護について勉強会を行った。

《4. 取り組みの結果》

終末期の体調不良兆候化見られた時点で配置医師を中心とし他科医師のコンサルテーションを受けその都度、家族へ施設医療でできること、できないことの説明を行い十分理解を得られるまで話し合いを持った。本人や家族の意思が確認されることにより職員も同じ気持ちで看取りに取り組む姿勢がみられた。

施設内研修では、特に新人職員の育成に配慮し人の死に携わる仕事の尊さ、倫理観についての教育に重点を置いた結果、看取りが終わったのアンケートでは、喜んでいただいたこと、もっとこうしかったことなど前向きな意見が多く出た。

《5. 考察、まとめ》

「ここで看取りができてよかった。」と家族から言葉を戴いたことでさらに看取り介護の充実、質の向上を図ることが重要と感じた。

「看取り」それはなにひとつ同じものはなく、たった一度のものだからである。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご家族に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

枯れるように死にたい

「老衰死」ができないわけ

田中奈保美 著

《8. 提案と発信》

予想がつくようにつかない入居者の命に対し看護師は職員の思いや葛藤を受け止め適切に育成していかななくてはならない。

今後も入居者にとって、かけがえのない家族の絆を深めるお手伝いをし続けることが施設の看取り介護であると思う。